

要旨 中国語と韓国語の発音と意味の互換性を重視して漢文を解説するものである

## 2 1 沙至比跪の語源は「巫城の公主」のことです

『日本書紀』神功紀62年に「六二年、新羅が朝貢しなかった。その年襲津彦を遣わして新羅を撃たせた。百濟記はいう・・・壬午年、新羅は貴国に貢上しなかった。貴国は沙至比跪を遣わして撃たせた。新羅人は美女二人に着飾らせて港に迎え誘った。沙至比跪はその美女を受け取り反って加羅国を伐った。・・・天皇は大いに怒り、すぐさま木羅斤資を遣わして、軍勢を率いて加羅に來集しその社稷を復した。」とある。

沙至比跪の沙は漢音でサ (s a) と発音し、至は漢音・呉音でシ (s i) と発音し、比は漢音・呉音でヒ (h i) と発音し、跪は漢音でキ (k i) と発音するのであるから、沙至比跪は「さしひき」と読むのである。

「さし」とは「城」のことである。継体紀8年に「伴跛、築城於子吞・帶沙而連満奚、・・・以備日本」とある。これは「伴跛 (はへ)、城 (さし) を子吞 (しとん)・帶沙 (たさ) に築 (つ) きて、満奚 (まんけい) に連 (つ) けて・・・日本 (やまと) に備ふる」『字訓』(白川静著) と読むものである。また、韓国では社を「サツア (s a s s a h)・サ (s a)」と発音するので、山中巫城などの寺社を含めて (さし) と表現しているのである。

「ひき」とは「匹」のことである。三～四世紀代は馬韓系の巫術が発達していた。「宗系者は山中巫城により祭祀をつかさどり、司祭である宗主(女巫)は匹(配偶者のこと。国主・葛文王・公主王ともよぶ)をはべらせ子を生み、王に差し出すか、宗系をつがせる。・・・宗主は名目上の国主であり、本来神事をつかさどり、匹はその保護者にすぎない。』『韓国古地名の謎』(光岡雅彦著) とあるので、匹には民衆を巫術力で統率するが、兵を育てての武力遂行は無いことが判るのである。

沙至比跪とは「巫城の匹(葛文王)」のことである。宗主や匹(葛文王)の政治権力が強くなると大王権と対立することになるので、大王がそのような危険なことを許すことは無い。大王(天皇)からは、巫術で強い権力を持っていた沙至比跪に「新羅をめぐめて強くたたき当たってこい」旨の指示があったのである。しかし、その意味を解することなく新羅国に寝返り加羅国を攻めたのである。

大王(天皇)はすぐさま木羅斤資を遣わしている。韓国語で「木」はナム (n a m u) と発音するので「木羅」はナムラ (n a m u r) と発音することになる。韓国語にナムラダ (n a m u r a d a) という語があり(ダは接尾辞)、その意味は「叱かる。叱責。」である。斤資は、前述した様に聖旨(コンス)のことで「神語、神の意向」の意である。

大王（天皇）は、直属の部下に武力遂行の指示を出し、軍勢を加羅国に送り新羅国を撃つことを指示したのである。この指示が沙至比跪に対しての叱責であり、斤資（コンス・聖旨・神の意向）なのである。

送られた強い軍勢は、新羅国に侵略された加羅国の領地を取り戻し、さらに新羅国の領地の一部を加羅国の領地にしたのである。社稷とは『論語（先臣）』に「国家。朝廷。」とあり、また、『礼記（祭儀）』に「建国の時、天子・諸侯が壇を設けて祭った土地の神（社）と五穀の神（稷）。」とあるから、加羅国の朝廷と神壇を再建したのである。これが「社稷を復した」である。

沙至比跪は、山中巫城の葛文王のことである。文字を逆転して書くと「葛文王・巫城・山中」となり、主要な語をつなげると「葛・城・山」となる。神功紀には「襲津彦を遣わし・・・」とあるから葛城襲津彦のことであり、その居所は奈良盆地南西部（現御所市周辺）である。ここには葛城山があり、その東側山麓を本拠地とした大豪族であった。

葛城の葛は、漢音でカツ・呉音でカチと発音する。韓国語で「値打ちがある」をカプチダ（k a p t c h i d a）と発音する（ダは接尾辞）が、（p・t）音には母音が無いので発音しても聞き取れないのでカチ（k a c h i）と聞こえるのである。金官加羅国の王は荷知（カチ）王と言っていたのであるから、葛城とは巫城に居する大豪族の王である。

襲は「重ねる、従来の方法や地位をそのまま引き継ぐ」の意であり、津は川であり港であり国の意であるから、襲津とは「国を継ぐ」の意味である。彦は卑狗のことで、卑は韓国語で「稀」と同音であり、狗は「王」の事であるから「ごく少ない、まれな王」という意味なのである。

葛城山麓には、葛城の五社と云われる鴨都味波八重事代主命神社、葛城坐一言主神社、高天彦神社、高鴨阿治須岐託彦根命神社、葛城坐火雷神社は『延喜式・神名帳』が定める最高の社格を持つ神社である。盆地を介して東側の三輪山麓には大王家（天皇）の大神神社がある。先述したように、三輪の輪は韓国語でウォン（w o n）と発音し、貨幣単位となっているが、中国の元（g e n）が語源であり、語頭の（g）音を発音しないためにこの発音となるのである。三輪とは三元のことであり「天と地と人」の意味である。葛城の神と言えば「一言主神」が著名である。言の発音は「ゲン・ギン・ゴン」である。元の発音は「ゲン・ガン・ゴン」であるから、一言とは一元と同音なのである。一の意味は「全部をひとまとめにする。ひとつにする。ひとつとなる。」であり、元の意味は「みなもと。王朝の始まり。」であるから、一元とは「ひとつにするみなもと。事物の根元が唯一であること。全部をひとまとめにする王朝の始まり。」となる。主の意味は「ひと所にじっととどまって動かない者。靈魂が宿るしるしとして、じっとたてておく形代。君主の略」である。一言主神は葛城坐であるから「葛城山の巫城に坐しておわす、全部をひとまとめにする王朝の始まりで、靈魂が宿る印としてじっと立ててお

く形代の主なる人」という意味になるのである。これは巫城の宗主・公主の事である。

『古事記』には、雄略天皇が一言主神と出くわされる話がある。供の宮人たちを引き連れて葛城山を行幸されていたところ、向こうから天皇の行列そっくりの一団と出会う。双方が矢をつがえて一触即発の雰囲気になるが、相手が「私は葛城の一言主の神だ」と名のられる。すると、天皇は恐れかしまれ、武具や衣服をこの神に献上されたというのである。

天皇がかしまれたのには理由がある。先に述べたように、一言主とは「全部をひとまとめにする王朝の始まりで、靈魂が宿るしるしとして、じっとたてておく形代の主なる人」であるから、宗主でない雄略天皇には「靈魂が宿るしるしとしての形代」がないのである。形代とは「神靈の代わりとして天下に尊いものと据えられた人」であるから、『日本書紀』にあるように、絶えず自己主張をしてはばかり、疑い深い性格で、多くの人々を残酷にも殺りくしているのであるから、「形代」はみじんも無い事がわかるのである。

先述したように、王位の継承理論とは、山中巫城の宗主（巫女）と匹（配偶者・葛文王）の血をひく聖女を正妃にむかえることによって、王位の継嗣（太子の決定）と絶対性（「天祐」）をあたえていたのである。仁徳天皇は、葛城襲津彦の娘の磐之姫を皇后としているので「形代」を有しており、その子である履中天皇・反正天皇・允恭天皇は大王となりえたのである。しかし、允恭天皇は、宗主葛城家以外の忍坂大中姫を皇后しているので、安康天皇と雄略天皇には王位継嗣の理論から外れているのである。このことを葛城山で一言主神に指摘されたのであろう。天皇は「恐れ多いことです」と言っていることが『古事記』に記載されている。雄略天皇は葛城円大臣の娘・韓媛を妃としている。これで雄略天皇は「形代」を獲たことになるのである。このことを埼玉県の稻荷山古墳出土の鉄剣銘に四七一年時のものとして「獲加多支鹵大王」と刻んであるのである。加多支鹵は「形代」の事であるから、漢文で読むと「形代ヲ獲シ大王」となるのである。

『記紀』編纂者は「王位継承理論」を承知していたのである。仁徳天皇の實在はよくわかっていないのであるが、「形代」としての磐之姫を皇后としているのである。沙至比跪の新羅寝返りの件により、葛城家は衰退していくのである。

葛城の五神の中に「鴨」の名を持つ神が鴨都味波神社と高鴨神社である。先述したように、新羅の郷歌に倭理叱軍とあり、これをオリクン（o r i t k u n）と発音している。倭がオリであり、韓国語でオリ（o r i）と発音する語に鴨があるのであるから、倭を「ヤマト・鴨都」と表現しているのである。味は韓国語でもミ（m i）であり微と同音である。波は韓国語でパ（p h a）と発音し把と同音であるから、味波とは微把の事で「目立たないようににぎる」の意味である（味波が三輪であれば三元〈天・地・人〉）。高は韓国語でクダ（k k u d a）と発音する。これと同音の語に「大きい」があるので、高鴨とは「大倭」と言っていることになるのである。

## 2 2 瓠公の語源は「豪の君」のことです

朝鮮族は、蒙古方面から太陽の光輝・光明の地をもとめて東方へ向かって来て、白頭山が太陽・光明神の宿る所と考えていたのである。朝鮮古語で光明という意味であるチョソン（朝鮮）と呼び、白頭山の樹林を蘇塗（スドリ）と名付け、祭主を一人置いたのである。

『史記』朝鮮列伝にみえる「真番朝鮮」や「真莫朝鮮」の真・番・莫は、真大王（シンハン）朝鮮・番副王（プルハン）朝鮮・莫副王（マルハン）朝鮮のことを表現しているのである。この三人の王が分割統治することになり、シンハンはハルビン付近を首都にし、プルハンは蓋平付近を首都にし、マルハンは平壤付近を首都として統治したのである。

しかし、真番朝鮮が匈奴や漢によって何度も侵略されたことにより、莫朝鮮の王は番朝鮮の人民に洛東江流域一帯を分与して住ませたのである。侵略は真朝鮮にも及び莫朝鮮王は真朝鮮の人民を朝鮮半島の東側の地域に住ませたのである。土地所有権者は莫朝鮮王であり借地権者は真番朝鮮である。莫朝鮮王はマルハンを吏読字で「馬韓」と表記して国号としたのである。同様に番朝鮮のプルハンを「弁韓」とし、真朝鮮を「辰韓」と表現するようになったのである。

秦が滅んだあとの漢は、内乱の混乱で遼東方面の管理が充分に行えず、漢や燕・斉・越などの亡命者や商人が多数住み着いて雑然とした地となっていた。この地に燕人の満が来て王となり平壤を都として、漢の軍事援助と経済援助を手に入れている。莫朝鮮の王都であった平壤を手放して今のソウルを都としなければならぬほどに部外者・敵対する人（倭人・愛人・外人・倭人）がはびこっていたのである。このことを『山海経』に「蓋国在鉅燕南、倭北。倭属燕（思うに、境界で囲んだ領域は、間がおおきくあいている燕の南、倭の北に在る。倭は燕に属する。）」と記録されているのである。

ハルビン付近を領有していたシンハン（真朝鮮）は、新しい居住地となった朝鮮半島東部に新たな辰韓の建国を始めた。疲弊した国民の心の支えになるようにと神話を活用している。その神話の中に瓠公とある。韓国語で瓠は、ホ（h o）と発音し、乎・呼・豪と同音である。前述したように、卑弥呼は「稀微豪」と同音であり「たぐいまれなる財産や勢力のある人」の意味であるから、瓠公とは「豪君」と言っていることになる。豪の意味は「つよい。荒々しくて勇ましい。すぐれる。能力や才知などが人よりまさっている。おさ。かしら。率いる人。長。その道の達人。財産や勢力のある人。ぜいたくではでやかな。やまあらし。長くて荒い毛」であるから、朴氏・昔氏・金氏の始祖を一方にかたよらないで支援できたのである。

## 2 3 朴赫居世の語源は「外革巨勢」のことです

「赫居世伝承」の冒頭部分を見ると、蘿井という泉。水が清く澄んでいる。四囲に老松

のある霊泉。光が天上から地上の蘿井に閃いた。白馬が天を駆け降りて蘿井へ向かった。蘿井の畔の草むらに大きな朴形の卵が転がっていた。卵を割ると玉のような男の子が出てきた。皮膚（体の表面）から五色の彩光が輝いた。とある。

朴は、漢音でハク、呉音でホク、常読でボクであり、韓国語ではパク（p a k）と発音する。この発音と同じ語に「雹・璞・虬」がある。雹は漢音でハク、呉音でボクであり、韓国語でパク（p a k）である。中国や韓国には「雹は神である」という信仰が古くからある。それは『後漢書』巻 90・烏桓鮮卑列伝に檀石槐の母親の言葉で「ある時の日中、外を歩いていると雷鳴が聞え、天を見上げると、雹が私の口に入ったので飲み込んだところ、身重になり、10 ヶ月で子供が生まれた。この子（檀石槐）はきっと天の授けた子、鮮卑族を率いる英雄になります」とあることから、その様な信仰が生まれたものと思われるのである。

朴形の卵とは「璞」であれば「あら玉。掘り出したままで磨かぬ玉」の意であり、「虬」であれば「ちいさな丸いうり」の意味である。卵を割ると「玉のような男の子が出てきた。皮膚（体の表面）から五色の彩光が輝いた」というのは「雹は神である」を表現しているのである。

朴は韓国語でパク（p a k）であり、瓢（ふくべ）はパカ（p a k a）と発音し、語尾を強く発音したパカツ（p a k k a t h）は「外・表」の意となるのである。卵を割ると「皮膚（体の表面）から五色の彩光が輝いた」と表現されている所の「皮膚（体の外側表面）」が「朴」なのである。

赫居世は「蘿井の泉の傍」に、妃の閼英は「閼英という井戸の縁」で発見（誕生）されている。「井」の意味は「地を掘り下げて地下水を汲み取る所」である。「地」は韓国語でタ（t a）・タング（t a n g）の発音であり、「多」と同音である。「掘り下げる」は韓国語でパダ（p h a d a）と発音する。この発音を吏読字で「婆那」と書くことが出来るのである。「昔脱（吐）解はもと多婆那国の所生なり」とある所の「多婆那」であるが、この意味は「地を掘り下げる」であるから、「井」の説明となっているのである。国は韓国語でクク（k u k）と発音する。これと同音の語があり、その意味は「液汁・水気・物体からしみでる液」であるから、「多婆那国」とは「地面を掘り下げて、しみでる水気」の意味となるのである。「所生」とは「生まれた所」であるから、赫居世や閼英と同様に昔吐解も「井」の傍らで生まれた事がわかるのである。倭国から東北一千里の韓国にある「井」のことである。それらの井の周りには「松」が生い茂っているとある。『詩経・小雅』に「松の茂がごとし」とあり、松は常緑であるところから「節操・長寿・繁茂」のたとえにつかわれている。節操とは「信念をかたく守って変えないこと。志を立てて変えないこと」であるから、村長や村民の期待や願望が伝説の中に強く表現されているのである。

「光が天上から・・・蘿井に閃いた。白馬が天を・・・蘿井へ向かった。」とある。昔から馬を呼ぶのに「アカ・クロ・シロ・アオ」と色で呼んでいる。アカは明・クロは

暗・シロは顕・アオは漢と漢字で表現している。シロの顕には「あきらか。いちじるしい。」の意味があり、著しとは「神威が明らかである。」であり、神威とは「神の威光。神の威力。」であるから、白馬には「神の威光の馬」という意味が東アジア地域の人々の意識にはあるのである。

「朴形の卵」から生まれた男の子は、蘇伐都利に育てられ十三歳で王位に即している。この頃になると辰韓六部落は、人口の数も増えてきて、交通も頻繁となり、隣の外国から襲撃されたり、脅かされたりと、今まで睦まじかった六部落にも争いが起こるようになったのである。そういう時に蘇伐都利が「誉れの高い知徳を兼備した神人の朴赫居世を王に戴く」と提案し六部落の長も了承したのである。

赫の発音は、漢音でカク、呉音でキヤク、韓国語でヒョク (h y o k) であり、意味は「あかい。あきらか。燃えあがる火のように真赤なさま。火で照らされたように、はっきりと表れる。勢いが盛んなさま。」である。これは卵から生まれて十三歳までの期間を表現しているのである。

赫と同音の語に「革」がある。革の意味は「新しくなる。改善される。思いきって新しくする。たるんだものをピンと張って立て直す。今までの状態を取り除く。皮で作ったよろいやかぶと。あらためる。皮。」であるから、六部族間で争いが起こったり、隣の外国から攻撃されたりといった事態に対応できる体制を十三歳の王が起こしたのである。朴赫は「外革」であり、その真意は「思い切って外側の表面（国境の外壁）を新しくして、国内でのたるみをなくし、今までの状態を改善する。」である。

居は、韓国語でコ (k o) と発音し「巨」と同音である。世は、韓国語でセ (s e) と発音し「勢」と同音である。居世はコセと発音するもので、韓国語にコセダ (k o s e d a) と発音する語がある（ダは接尾辞）。その語の意味は「強い。猛々しい。荒っぽい。たくましい。」であり、「たくましい」の意味は「存分に満ち満ちている。豪勢である。存分に力強くがっしりしている。勢いや意志が力強く盛んである」である。

朴赫居世とは「外革巨勢」の発音を吏読字で表現しているものであり、その意味は「外側の表面（国境の外壁）を思いきって新しく改善し、勢いや意志が力強く盛んである」というものであり、居西干とは「大王」の意味である。大王は他にも「居瑟邯・尼師今」とあり、「瑟」も「師」も韓国語でシツ (s i t) と発音するのである。居は「巨大」の意であり、干は「王・君」の意味であるから、「西」は大と王をつなぐ接続助詞である。